

「やまだわら」の移植栽培基準例（JAくろべ版）

750kg穫り収量構成の目安

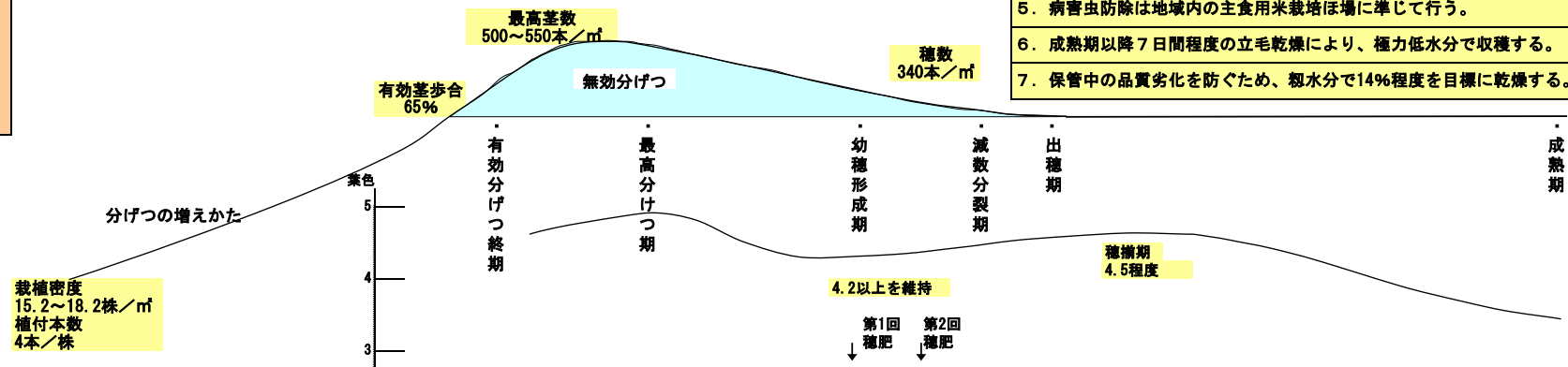
收 量 構 成	目 安
m ² 当たり最高莖数 (本)	500~550
有 効 莖 歩 合 (%)	65
m ² 当 たり 穗 数 (本)	340
平 均 一 穗 粒 数 (粒)	115
m ² 当 たり 粒 数 (百粒)	380~400
登 熟 歩 合 (%)	85
玄 米 千 粒 重 (g)	22. 6

土壤区分別施肥設計 (kg/10a)

土 壤 区 分		窒 素 施 用 量			三 要 素 合 計		
		基 肥		穗 肥	窒素	リン酸	加里
		側条施肥 体系	出穗25日前				
沖 積	CL	3.0 ~ 4.0	1.5	1.5	6.0~7.0	7.0~8.0	10.0~12.0
	L	3.5 ~ 4.5	1.5	1.8	6.8~7.8		
	SL	4.0 ~ 5.0	1.5 ~ 2.0	2.0	7.5 ~ 9.0		
洪 積	L~CL	3.0 ~ 5.0	1.5	1.8	6.3~8.3		

栽培のポイント

- | |
|-------------------------------------|
| 1. 4月下旬～5月上旬植えの移植栽培を基本とする。 |
| 2. 窒素施用量は「てんこもり」並とする。 |
| 3. 栽植密度は50～60株/坪程度とし、極端な疎植はしない。 |
| 4. 6月下旬～7月上旬の葉色は4.2を維持する。 |
| 5. 病害虫防除は地域内の主食用米栽培ほ場に準じて行う。 |
| 6. 成熟期以降7日間程度の立毛乾燥により、極力低水分で収穫する。 |
| 7. 保管中の品質劣化を防ぐため、初水分で14%程度を目標に乾燥する。 |



月 日	4 月		5 月		6 月		7 月		8 月		9 月			
	4/10		5/5		6/10		7/12		8/3		9/27			
生育期 区 分	育 苗 期		田植期		活着期		有効分げつ期		無効分げつ期		幼穂形成期 ～穂ばらみ期			
水管理			やや深水		浅水管理		中干し		間断かん水		出穂30日前からの入水 (ヒタヒタ水)			
											出穂から20日間は湛水管理 (落水を急がないように)			
栽 培 管 理 の ポ イ ン ト	● ゆっくりと耕起し、作土15cm以上を確保する。 ・ 田面の均平を図る。		・ 菜いもち予防のため苗箱施薬を行う。 ・ 育苗ハウスが二十五度以下になるよう管理する ● 播種は田植えの二十日前に行う。 ・ 十分に浸種して芽出しを確実に行う。		● 株数は坪当たり六十株を植え、良質の茎を早く確保する。 ● 茎肥量は地区の「てんこもり」並とする。 ・ 一株の植付け本数は四本とし、三cm程度の深さに植える。 ・ 活着後は浅水管理として分げつの発生を促す。 ・ 田植後はやや深水として活着を早める。		● 効率化を図る。 ・ 六月一月中旬から溝掘りを行い、水の入排水の適正な中干しにより、根の活力を高めるとともに、過剰分げつを抑制する。		● により、葉色低下を防ぐ。 ・ 出穂三十日前からの入水（ヒタヒタ水）		● 幼穂形成期の葉色は四・二・四・五に誘導する（四・二以下とならない）。 ・ 穂肥は出穂二十五日前から二回施用する。 ・ 穂いもち防除を行う。 ・ カメムシ類の発生源とならないよう、防除を行う。 ● 出穂から二十日間は湛水状態を保つ。		・ 成熟期の目安は出穂期からの積算気温一三〇〇～一三五〇℃とする。 ・ フェーン時はかん水して、乾燥害を防ぐ。 - の立毛乾燥により、極力低水分で収穫する。乾燥コスト低減のため、成熟期以降七日間程度一三〇〇～一三五〇℃とする。	